

阿波國 すきま 漫遊記

— 関東からの転入者による徳島再発見 —
VOL.15 火の見櫓

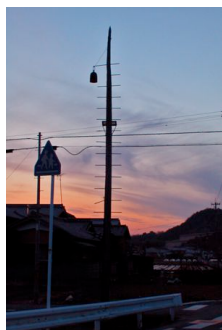


■阿波市土成町秋月

山の緑を背にした白銀の火の見櫓。集落の中からひととき高くそびえる姿は、ヨーロッパにおける教会の尖塔のように、風景を引き締める点景となっている。この物件は単なる見張り台の用途を超越した宗教的な美しさすら感じさせる。

徳島の特徴は木造が多いこと

路上観察のテーマとして火の見櫓は理解しやすい対象だろう。その觀賞方法は一般的な古建築に比べとやさしい。構造が剥き出しなので外見からほとんどのが読み取れるし、たいていは近くに寄って観察できるからである。デザイン的な面では色々な見方があるので、自分なりに「カッコいい」とか「カワイイ」とか感じたままに觀賞すればよいと思う。だがあえて火の見櫓ニアの視点でみると「姿がよい」「背が高い」「変わった構造」という3つの評価ポイントがある。そして徳島の火の見櫓の特徴を他県と比較してひとつだけ選ぶとしたら「変わった構造」ではないかと思う。何が変わっているかという、木造の火の見櫓が多いのだ。私も全都道府県の火の見櫓を見たわけではないが、他県では木造の火の見櫓を見つけないのはかなりむずかしい。それが徳島では比較的簡単に木造の火の見櫓を見つけないことができる。これは火の見櫓ニアにとって実にうらやましい環境と言えるだろう。



▶吉野川市鴨島町上浦

一本柱だが、足場が左右に均等になつていて、「魚のボウ」と呼んでいるタイプ。途中に足場が見えるが、この上から立つて半鐘を叩くのだ。私には絶対無理。



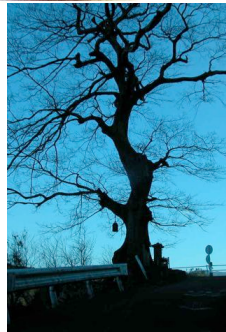
▶石井町石井

一本柱のシンプルな火の見。電柱のように足場が互い違いに取り付けられているのが特徴。元々は先端部分に半鐘が吊るされていたが、いまは下のほうに移されている。石井町方面にはこのような一本柱の木造火の見がいくつもある。



▶阿波市土成町吉田

火の見櫓とは、厳密には高いところから火事を監視する櫓のことだが、このように背が低く、半鐘を鳴らすだけのものも一階に絞る。これは柱と屋根だけの素朴な構造。よくありそうで実は貴重な物件だ。



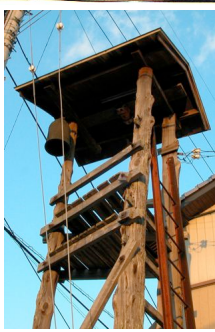
▶神山町兼瀬

半鐘を吊り下げる木造の柱を火の見櫓と呼ぶのなら、これも火の見櫓の一種かもしれない。神山町にある金鐘付きのムクキ。集落を見渡せる高台に立てていて、シンボリックで神々しい存在。



▶佐田町内村奥野々

県内で私が知る限り最もフラットな木造火の見櫓。田舎の田舎に水が溜まれば火はつきわたりやすい。住人が本能的に火は遠くから見ておく。二本あるが、実はこれは途中から枝分かれた音叉のような形の一本の木を利用している。



▶美馬市脇町原

国道1号と農道との交差点にある、二本柱の木造火の見櫓。周囲が住宅なので目立たないが、全国的に見てもかなりハイレベルな物件。これも田舎屋敷の中にあって、火の見櫓マニアの聖地となつていくかもしれない。



▶阿波市阿波町寒風

鉄製の小さな火の見櫓。一般的な鉄製の火の見櫓では増しの柱が乗るのだがこの物件は物見台部分の四隅から柱を立ち上げて屋根を載せている珍しい構造。立っている場所が高台の一角にあるので、櫓自体は低くてもいいのだ。県西の山間部では小さな火の見櫓が多くなる。



▶石井町藍畑第十

吉野川の堤防の斜面に立つ、これはもしかしたら、火事を見張るだけでなく、川の増水を見張るための櫓なのかもしれない。吉野川や那賀川の堤防には、こんな小さな火の見櫓が何箇所もある。



▶吉野川市鴨島町上浦

途中に張り出した小さな物見台の半鐘にも屋根がついた凝った作り。伊予街道や農道の旧道を走ると火の見櫓をたくさん見つけることができる。この物件はページの先頭で紹介している秋月の物件と屋根が似ているのと同じ鉄工所の作品かもしれない。



▶吉野川市川島町宇

現時点で、私にとって県内ベストの物件。屋根の反り、物見台のほじょい広さ、上部へ向かっての通風率、柱が下部で広がっているデザインなど、全体のバランスが理想的。また周囲に建物がなく遠くから見えるのもよい。

深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記 <http://www.sukima.com>